

下にまで光が届かなくなる。

光がなくなれば、光合成を最大の仕事としている葉はその存在理由を失う。

木としては光合成をしない葉を発芽させ成長させることは、それに必要な養分、エネルギーのムダである。

したがって、いわばコストを削減するためにムダな葉をつけることをやめてしまう。

葉がなくなると、もともと葉をつけていた枝はどこからも栄養をもらうことができなくなり、自然と枯れ落ちる。

したがって、光が十分に差し込まない下部には枝がなくなり、より“ドーム”という表現がふさわしい空間となる。

※ドーム状の空間、互いに重なり合わない樹冠の様子は摩耶山旧天上寺跡下方の森、大竜寺山門上方の森でも見ることができる。

◆D地点から山頂(G地点)まで

・ウバメガシの大木、アカシデ、アベマキの高木、

イスノキが観察できる。

ウバメガシの大木



・山頂に近づくにしいがコナラ、タカノツメ、アベマキといった落葉樹が混じってくる。ヤマモモも目に付き始める。またほとんど高木が見られなくなる。

☆何10年か前に原生林に人手が加わり、コジイなどが伐採されたのであろうか。

あるいは継続的に人手が加わってきたのかもしれない。

・阿弥陀堂のあたりからいわゆる二次林の森となる。

しかも高木はほとんど姿を消し

てしまい、上空を覆う樹冠はなく、空が見え、林床には日が差し込み、明るい森の姿を呈してる。

六甲山のどこでも見られる森林の姿である。



・二次林を構成している樹種はコナラ、タカノツメ、カクレミノ、ヤマモモ、ウバメガシ、アベマキ、ネジキ、コバノミツバツツジ、リョウブ、カゴノキなどである。

他にサカキ、ウラジロガシの幼木もある。



ヤマモモ



ウラジロガシ